



日本産ヒメキチジ属魚類の標準和名

松沼瑞樹¹・上阪健太²・山川 武²・遠藤広光²

Author & Article Info

¹ 近畿大学農学部環境管理学科 (奈良市)
k1139853@kadai.jp (corresponding author)
² 高知大学理工学部海洋生物学研究室 (高知市)

Received 18 November 2021
Revised 22 November 2021
Accepted 22 November 2021
Published 23 November 2021
DOI 10.34583/ichthy.14.0_35

Mizuki Matsunuma, Kenta Uesaka, Takeshi Yamakawa and Hiromitsu Endo. 2021. Standard Japanese names of three species of *Plectrogenium* recently described from Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 14: 35–38.

Abstract

Recently, the following three species of *Plectrogenium* (family: Plectrogeiniidae) were described from Japan, the former two having previously been identified as *Plectrogenium nanum* Gilbert, 1905 (now restricted to the Hawaiian Islands): *P. kamoharai* (standard Japanese name: Yoroi-hime-kichiji), *P. kanayamai* (Parao-hime-kichiji), and *P. rubricauda* (Hime-kichiji). A review of historical records about Japanese names of the above three species resulted that the long-time used name for species of *Plectrogenium*, “Hime-kichiji”, must be applied for *P. rubricauda*, and newly proposed Japanese names given for *P. kamoharai* and *P. kanayamai*. In Japanese waters, *P. kamoharai* is currently recorded from Shizuoka (Suruga Bay), Aichi (Enshu-nada Sea), Wakayama (Kii Channel), Mie (Kumano-nada Sea), and Kochi (Tosa Bay) prefectures on the Pacific coast of southern Honshu and Shikoku, and the East China Sea; and *P. rubricauda* from Shizuoka, Mie, Kochi, and Miyazaki (Hyuga-nada Sea) prefectures on the Pacific coasts of southern Honshu, Shikoku and Kyushu, whereas *P. kanayamai* is restricted to the Kyushu-Palau Ridge. Pictorial key to the Japanese species of *Plectrogenium* is provided.

ヒメキチジ科ヒメキチジ属 (*Plectrogeiniidae*: *Plectrogenium* Gilbert, 1905) は、これまで *Plectrogenium nanum* Gilbert, 1905 (タイプ産地: ハワイ諸島) と *Plectrogenium barsukovi* Mandrytsa, 1992 (ナスカ海嶺) の2種のみで構成されていたが、Matsunuma et al. (2021) による分類学的再検討の結果、8新種を含む10有効種が認められた。*Plectrogenium nanum* はこれまで日本を含めるインド・太平

洋から広く記録されていたが、真の *P. nanum* はハワイ諸島の固有種と考えられる (Matsunuma et al., 2021)。日本では、南日本の広域に“ヒメキチジ”*P. nanum* が分布するとされ (中坊・甲斐, 2013)、九州・パラオ海嶺からはヒメキチジ属の一種 *Plectrogenium* sp. が報告された (金山, 1982b)。その後、Matsunuma et al. (2021) は、2種が混同されてきた日本産“ヒメキチジ”を、*Plectrogenium kamoharai* (標準和名: ヨロイヒメキチジ) と *Plectrogenium rubricauda* (ヒメキチジ) として新種記載した。また、金山 (1982b) のヒメキチジ属の一種は、*Plectrogenium kanayamai* (パラオヒメキチジ) として記載された (Matsunuma et al., 2021)。本稿では日本産ヒメキチジ属3種と和名の対応を整理し、上記の措置をとった経緯を説明するとともに、それらの種の検索表を示す。

材料と方法

本稿で用いた標本と計測値は Matsunuma et al. (2021) に記載されている。本稿で用いた機関略号は下記のとおり: 高知大学理工学部海洋生物学研究室 (BSKU)、東京大学大学院農学生命科学研究科 (FUMT)。標準体長 (standard length) は体長または SL と略記した。魚類の標準和名の命名ガイドライン (日本魚類学会標準和名検討委員会, 2020) は、本文中では「ガイドライン」と略記した。各種の「日本からの文献記録」には、主要な文献記録を含めた。

***Plectrogenium rubricauda* Uesaka, Yamakawa, Matsunuma and Endo in Matsunuma et al., 2021**

ヒメキチジ

日本からの文献記録 (*P. nanum* として) 岡田・松原, 1938: 307, pl. 77-3 (*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同, 図は *P. rubricauda* に同定される; 高知県沖・熊野灘); Matsubara, 1943: 332, figs. 116, 117 (*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同, 図は *P. kamoharai* に同定される; 熊野灘・駿河湾); 松原, 1955: 1085, figs. 390A, pl. 115-397 [*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同, 図版は Matsubara (1943)

から転写；駿河湾・熊野灘・土佐湾]；金山，1982a: 279, pl. 195 (土佐湾)；尼岡，1984: 301, pl. 281-J [図は金山 (1982a) から転写]；中坊，2000b: 570, unnumbered fig. (*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同，図は *P. rubricauda* に同定される；駿河湾以南)；中坊・甲斐，2013: 717, unnumbered fig. [*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同，図は中坊 (2000b) の転写；駿河湾，熊野灘，土佐湾，沖縄トラフ]；村瀬，2021: 332, unnumbered fig. (宮崎県日向沖)。

標準和名の基準標本 BSKU 123395，体長 57.7 mm，土佐湾 (*P. rubricauda* のホロタイプ)。

標準和名適用の経緯 蒲原 (1936) は高知県から得られた標本を *P. nanum* として報告した。これが，日本からの初めての *P. nanum* の記録であるが，蒲原 (1936) は和名を提唱しなかった。その後，岡田・松原 (1938) は，*P. nanum* に対して和名ヒメキチジを新称として提唱し，日本での分布に高知沖と熊野灘を含めた [前者は蒲原 (1936) の引用，後者は著者らが直接観察した標本に基づく] と判断される。岡田・松原 (1938: pl. 77-3) が図示した熊野灘産の標本は，頭頂棘が短いことから，*P. rubricauda* に同定される。なお，標本番号が記載されていないため，図示標本を特定することはできなかった。

岡田・松原 (1938) が参照した標本は，現在では京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所に所蔵されていると考えられる。1938 年以前に松原によって熊野灘から採集された同実験所所蔵のヒメキチジ属標本を調査した結果，*P. rubricauda* と *P. kamoharai* の 2 種が含まれていた。したがって，岡田・松原 (1938) が和名ヒメキチジを提唱した対象には 2 種が混同されていたことになる。

なお，ガイドラインの条 2.2 によれば，日本産魚類の標準和名の起点は原則として中坊 (2000a) となる。中坊 (2000b) のヒメキチジ *P. nanum* の記載は，胸鰭鰭条数の範囲から *P. rubricauda* と *P. kamoharai* の 2 種を含む可能性がある。一方，掲載された描画には頭頂棘が短く，尾鰭後端が有色である特徴が認められ，これらは *P. rubricauda* のものと一致する。したがって，標準和名ヒメキチジが指す種タクソンに 2 種が混同されていることに変わりはない。

以上のとおり，標準和名ヒメキチジに該当する種タクソンを特定できないため，Matsunuma et al. (2021) では *P. rubricauda* に対して，改めて標準和名ヒメキチジを提唱した。また，岡田・松原 (1938) の図示標本を特定できないため，新たに標準和名の基準標本を指定する必要がある。そこで，ガイドラインの条 4 の注 14 にしたがって，*P. rubricauda* のホロタイプを標準和名の基準標本に指定する。なお，本種の種小名は，本種の特徴である赤色の尾鰭に由来する (Matsunuma et al., 2021)。

分布 日本と台湾に分布するが，台湾産の標本は更な

る検討が必要とされた (Matsunuma et al., 2021)。日本国内では静岡県，三重県，高知県および宮崎県から記録されている (Matsunuma et al., 2021)。ヨロイヒメキチジと同所的に分布するが，ヒメキチジの方が採集例は少ない。

***Plectrogenium kamoharai* Uesaka, Yamakawa, Matsunuma and Endo in Matsunuma et al., 2021**

ヨロイヒメキチジ

日本からの文献記録 (*P. nanum* として) 岡田・松原，1938: 307, pl. 77-3 (*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同，図は *P. rubricauda* に同定される；高知県沖・熊野灘)；Kamohara，1938: 48, fig. 24 (高知県沖)；Matsubara，1943: 332, figs. 116, 117 (*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同，図は *P. kamoharai* に同定される；駿河湾・熊野灘)；松原，1955: 1085, figs. 390A, pl. 115-397 [*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同，図版は Matsubara (1943) から転写；駿河湾・熊野灘・土佐湾]；石田，1997: 220, unnumbered fig. (土佐湾)；山田ほか，2007: 409, pl. 19-5 (東シナ海南部) 中坊，2000b: 570, unnumbered fig. (*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同，図は *P. rubricauda* に同定される；駿河湾以南)；中坊・甲斐，2013: 717, unnumbered fig. [*P. rubricauda* と *P. kamoharai* が混同，図は中坊 (2000b) から転写；駿河湾，熊野灘，土佐湾，沖縄トラフ]；池田・中坊，2015: 362, pl. 103-4-6 (和歌山県紀伊水道)。

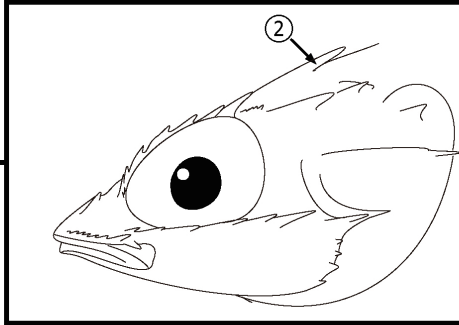
標準和名の基準標本 BSKU 121886，体長 71.7 mm，土佐湾 (*P. kamoharai* のホロタイプ)。

標準和名提唱の経緯 岡田・松原 (1938) の後，Kamohara (1938) は高知県沖で得られた標本を *P. nanum* に同定し，新和名ヒメヨロイカサゴを提唱した (前者は 9 月出版，後者は 10 月出版)。和名ヒメヨロイカサゴは普及せず，近年では *P. nanum* の標準和名は一貫してヒメキチジが用いられてきた。Kamohara (1938) が用いた標本は戦災で失われ，BSKU には現存していない。しかし，Kamohara (1938: fig. 48) の *P. nanum* の描画と記載は，それが *P. kamoharai* であることを示している (胸鰭鰭条数が 22, 23；頭頂棘が著しく長い；尾鰭の横帯がやや内側に位置し，鰭の後端は無色)。

和名ヒメヨロイカサゴが *P. kamoharai* に対して命名されたことは明らかであるが，カサゴは一般的にカサゴ属のメバル科魚類あるいはフサカサゴ科魚類を想起させるため，これをヒメキチジ科魚類に適用すると標準和名の安定性が損なわれることが予想される。したがって，Matsunuma et al. (2021) では改称 (ガイドラインの条 8) が適切と考え，*P. kamoharai* に対する標準和名をヨロイヒメキチジと改称した。標準和名の基準標本は *P. kamoharai* のホロタイプである (ガイドラインの条 4)。

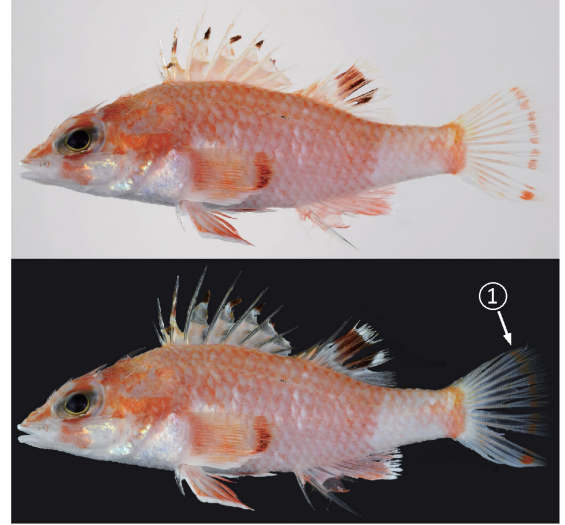
Key to the Japanese species of *Plectrogenium*

- ① Caudal fin with submarginal red band (when fresh) and whitish posterior margin
- ② Parietal spine long, 7.4–11.1% of SL
- ③ Pectoral-fin rays modally 22 (21–24)

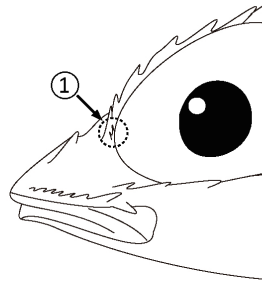


- ① Posterior portion of caudal fin entirely red
- ② Parietal spine short, 4.6–7.3% of SL
- ③ Pectoral-fin rays modally 20 (19–21)

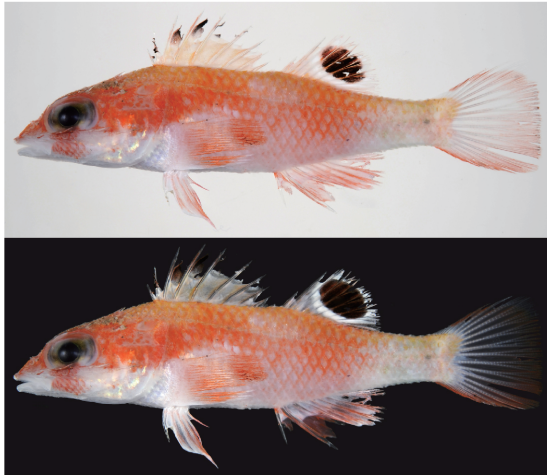
“Yoroi-hime-kichiji” *P. kamoharai*



- ① Supplemental preocular spine absent
- ② Interorbital spines 0–6
- ③ 2nd anal-fin spine short, 15.9–21.0% of SL



“Hime-kichiji” *P. rubicauda*



- ① 0–2 supplemental preocular spines present
- ② Interorbital spines 6–18
- ③ 2nd anal-fin spine long, 21.1–23.4% of SL



“Parao-hime-kichiji” *P. kanayamai*



Fig. 1. Key to the Japanese species of *Plectrogenium* based on Matsunuma et al. (2021). Photo specimens: *P. kamoharai*, BSKU 121886, holotype, 71.7 mm SL; *P. rubicauda*, BSKU 123395, holotype, 57.7 mm SL; *P. kanayamai*, BSKU 29335, holotype, 60.0 mm SL (top, fresh condition) and FUMT-P 3922, paratype, 54.4 mm SL (bottom, preserved condition).

標準和名ヨロイヒメキチジは、*P. kamoharai* の特徴である著しく長い頭頂棘を鎧にみたてたことに由来し、Kamohara (1938) の命名行為に敬意をこめる意味合いを含む。なお、本種の種小名は蒲原稔治博士への献名である (Matsunuma et al., 2021)。

分布 日本と台湾に分布し、日本国内では静岡県、愛知県、和歌山県、三重県、高知県および東シナ海から記録されている (Matsunuma et al., 2021)。

Plectrogenium kanayamai Uesaka, Yamakawa, Matsunuma and Endo in Matsunuma et al., 2021

パラオヒメキチジ

日本からの文献記録 (*Plectrogenium* sp. として) 金山, 1982b: 278, pl. 196 (九州・パラオ海嶺).

標準和名の基準標本 BSKU 29335, 体長 60.0 mm, 九州・パラオ海嶺 (駒橋海山) (*P. kanayamai* のホロタイプ).

標準和名提唱の経緯 金山 (1982b) は, 本種をヒメキチジ属の一種 *Plectrogenium* sp. として詳細な記載とともに報告した. これまで本種に対して命名された標準和名は存在しないため, Matsunuma et al. (2021) は新たにパラオヒメキチジと命名した. 標準和名の基準標本は *P. kanayamai* のホロタイプである (ガイドラインの条 4). 標準和名はタイプ産地に因み, 種小名は本種を初めて報告した金山勉博士への献名である (Matsunuma et al., 2021).

分布 日本, 台湾および天皇海山に分布し, 日本国内では九州・パラオ海嶺からのみ記録されている (Matsunuma et al., 2021). 分布パターンから本州や四国の沿岸で採集される可能性は低い.

日本産ヒメキチジ属 3 種の検索表

検索表を Fig. 1 として示す. 3 種の詳細な比較は Matsunuma et al. (2021) に記載された.

生鮮時であれば尾鰭の色彩が識別に有効で, ヨロイヒメキチジでは赤色の横帯が後縁よりやや内側に位置し, 鰭の後端は白色であるのに対して, ヒメキチジとパラオヒメキチジは後半が広く赤色であることで異なる. また, ヨロイヒメキチジは 2 種と比較して, 頭頂棘 (parietal spine) が長く, その長さは体長の 7.4–11.1% であることでも特徴づけられる (ヒメキチジでは 4.6–6.4%; パラオヒメキチジでは 5.1–7.3%). 頭頂棘の差異は小型個体でも有効である (Matsunuma et al., 2021: fig. 10a). さらに, ヨロイヒメキチジは胸鰭鰭条数の最頻値が 22 (21–24) であるのに対して, ヒメキチジとパラオヒメキチジでは 20 (19–21) と異なるが, 範囲が若干重なるため注意を要する.

ヒメキチジはパラオヒメキチジによく似るが, 前者では眼窩前縁側面の窪みに小棘 (supplemental preocular spine) がなく (後者では 0–2 本の小棘がある; Matsunuma et al., 2021: fig. 21), 両眼間隔域の隆起線上の棘数 (interorbital spines) が少なく 0–6 本であること (6–18 本), 第 2 臀鰭棘が短くその長さは体長の 15.9–21.0% であるこ

と (後者では長く, 体長の 21.1–23.4%) などで識別される (Matsunuma et al., 2021: figs. 10, 18b).

謝 辞

本研究を行うにあたり, 国内外の多くの研究機関・研究者から標本調査, 標本に関する情報・写真の提供などのご協力を頂いた. 改めてお礼を申し上げる. 本研究の一部は JSPS 科研費 (21K14905) の援助を受けた.

引用文献

- 尼岡邦夫. 1984. ヒメキチジ *Plectrogenium nanum* Gilbert, pp. 301–302, pl. 281. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編) 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版会, 秦野. xxii + 597 pp.
- 石田 実. 1997. ヒメキチジ *Plectrogenium nanum*, pp. 220–221. 岡村 収・尼岡邦夫 (編) 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 蒲原稔治. 1936. 高知市附近の魚類追記 (VIII). 動物学雑誌, 48: 17–22.
- Kamohara, T. 1938. On the offshore bottom-fishes of Prov. Tosa, Shikoku, Japan. Maruzen, Tokyo. 86 pp.
- 金山 勉. 1982a. 195 *Plectrogenium nanum* Gilbert ヒメキチジ, pp. 278–279, 396. 岡村 収・尼岡邦夫・三谷文夫 (編) 九州・パラオ海嶺ならびに土佐湾の魚類. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 金山 勉. 1982b. 196 *Plectrogenium* sp. ヒメキチジ属の一種, pp. 278–279, 397. 岡村 収・尼岡邦夫・三谷文夫 (編) 九州・パラオ海嶺ならびに土佐湾の魚類. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 岡田彌一郎・松原喜代松. 1938. 日本産魚類検索. 三省堂, 東京. xi + 584 pp.
- Matsubara, K. 1943. Studies on the scorpaenoid fishes of Japan (II). Transactions Sigenkagaku Kenkyusyo, 2: 171–486, pls. 1–4.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索 (2–3). 石崎書店, 東京. vi + 791–1605, xiv + 135 pls.
- Matsunuma, M., K. Uesaka, T. Yamakawa and H. Endo. 2021. Review of the Indo-Pacific scorpaenoid genus *Plectrogenium* Gilbert 1905 (Plectrogeniidae) with descriptions of eight new species. Ichthyological Research, doi: 10.1007/s10228-021-00844-z (Nov. 2021).
- 村瀬敦宣. 2021. ヒメキチジ *Plectrogenium nanum*, pp. 332–333. 村瀬敦宣・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏 (編) 新・門川の魚図鑑. ひむかの魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡.
- 中坊徹次. 2000a. 日本産魚類検索 全種の同定. 第 2 版. 東海大学出版会, 東京. lvi + 1748 pp.
- 中坊徹次. 2000b. 188. フサカサゴ科 Scorpaenidae, pp. 565–595, 1524–1528. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 2 版. 東海大学出版会, 東京.
- 中坊徹次・甲斐嘉晃. 2013. 199. ヒメキチジ科 Plectrogenidae, pp. 717, 1950. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 日本魚類学会標準和名検討委員会. 2020. 魚類の標準和名の命名ガイドライン. URL (8 Oct. 2021)
- 山田梅芳・時村宗春・堀川博史・中坊徹次. 2007. 東シナ海・黄海の魚類誌. 東海大学出版会, 秦野. lxxiv + 1262 pp.